



Title	コミュニケーションスタイルが変われども
Author(s)	田中, 志緒理
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81415
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コミュニケーションスタイルが変われども

株式会社ドキュメンタリージャパン プロデューサー

(2011 年大阪大学大学院 言語文化研究科前期博士課程修了)

田中志緒理

私が東京でドキュメンタリー映像制作業に携わり始めて早 10 年。そんな折、学生時代に一度も授業を受けたことがなかったにも関わらずご縁あってお世話になっていた林田先生と、久しぶりにお話しする機会があった。大阪と東京の距離も、更にかなりご無沙汰だった年月をも感じさせない林田先生とのオンライン対面談話をきっかけに、授業 2 コマにゲストとしてご招待いただくこととなった。

2020 年に世界的パンデミックとなった新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のおかげで急速に広まった、Zoom¹。個人的には、数年前から海外のクリエイター達とやりとりをする際によく利用していたものの、国内においては、いかなる打ち合わせでも、直接会うことに重きを置く職業柄、全く出番がなかった。私は出産を機にこの 5 年ほど、個人的にテレワーク多めで仕事をしていたのだが、【あまり出社しない＝雑談ができない＝人間関係が希薄になる＝そのせいで仕事が捗らない】と考えるタイプの人が多い職場環境だったため、いくら近年発展している Zoom 等のデジタル・コミュニケーションツールの使用を促そうとも受け入れられることが少なく、会社に来ない人間 (私) はますます孤立していくといった状況にあった。だからこそ、今回 Zoom なり、オンラインで仕事を進めることがようやく国内でも認知され推奨されるようになったことについて、実はとても喜ばしく感じている。(孤高のテレワーカーだった私も、今では会社のデジタル改革推進係に任命されている！)

さて、2020 年 7 月 7 日に Zoom 上で執り行われた林田先生ご担当の授業「地球市民の健康管理」と「多文化サポート概論」の授業にて、外国語学部出身の印南敬介氏と文学部出身の矢島裕章氏と共に、卒業生の先輩ゲストとして登壇させていただいた。両氏とも、しっかりと準備されたパワーポイント資料に、要点のまとまった、そして穏やかにとてもわかりや

すい語り口で、画面の向こうでひとり舌を巻く。私はというと、まとまりのない話を延々としながら、用意していた写真のデータ量が重すぎたため、話の途中で Zoom アプリが落ちる。また、その復旧に焦り、結局予定の半分くらいの内容しか話すことができなかった。普段人前に出て話す機会が皆無の黒子のような仕事をしているから、などと言い訳はできない。オンラインであろうとなかろうと、プレゼンするにはしっかりとした準備が必要。そんなこと学生時代から嫌になる程経験していなかったのか。もし戻れるなら、授業前夜に大慌てで資料写真をかき集めていた自分に口を酸っぱくして言ってやりたい。

授業の話に戻ろう。今回の授業の一つは「地球市民の健康管理」という看板を掲げたもの。何の健康管理もせず順調にコロナ太りする私が引き受けてしまったが何を話せば良いのか。すかさず届いた林田先生からのメールには、「学生時代の多文化交流に関する話題を中心に話していただければ」とあったので、とりあえず一安心。受講生の多くが学部生とのことだったので、私自身がその年頃までに何をしていたのかという事柄を中心にお話しさせていただくことにした。

今回の授業で私が話した内容は、概ね下記のようなことだった（はず）。

- 自分の人生初期、大学入学前の時期に、海外との関わりを持つようになったきっかけ
- 外国語学部（専攻言語：ペルシア語）時代の過ごし方
- 学生時代をきっかけに今の仕事や生き方に繋がっていること
- ドキュメンタリー制作の仕事について

かいつまんで言うと、まだ観光都市化される前の古き良き商売人の街・大阪で生まれ育った私が、中学生で他県に引越したことで、否応なく異文化の存在を初めて知ることになる。また同じ頃にアメリカに行く機会に恵まれたことをきっかけに、高校でアメリカに留学し、旧大阪外国語大学入学以降はイラン、アフガニスタン、フランス、イタリアと、より他言語・多文化に携わることになった。海外生活を送る中、世界にはメディアが伝えるべき大切なことがまだまだ沢山あると気がつき、現在の「ドキュメンタリー映像制作」という仕事に繋がっていった、という話である。こう書くと我ながら結構カッコいい経歴だ。授業当日は緊張（と前述の準備不足）のあまり、非常にまとまりのない話になってしまったので、カ

ツコいいんじゃないなくて、〈要点は『』(カッコ)で括るように〉という自己反省しかないけれども。

そんなしっちゃかめっちゃかな話だったにも関わらず、質疑応答では受講生からいくつかが質問をいただけた。実は、それが本当にありがたかった。社会に出てからひたすら自己肯定感の低下が続く私でも、学生時代は情熱と行動力に溢れた人間だったんだなあと、人に話すことで改めて思い出すこともできたし、またそんな話に多くの方が耳を傾けてくださったことが嬉しく、学生のための授業なのに、結局自分のためになってしまった。その時質問いただいた内容も、緊張していたので正直あまり覚えていないけれど、どうか私の極私的経験談が、誰かにとって、何かしらの役に立っていればなあ、と願うばかりである。ただ、授業の後一つ気になっていたのは、たまたま外国に行く機会に恵まれていた時代に学生だった私の話が、コロナ禍の中で学生生活を送る人たちにとってどんなふうに聞こえたのだろうということだ。海外に出たくても出られない、学校にも登校すらできない、そんな状況下にある学生さんたちの気持ちにもう少し配慮しながら話すべきだったのではないかと反省している。とはいえ、新型コロナウイルスがなかった頃から訪れる人も出回る情報も特段に少なかった中東地域で学生時代に暮らしていたという経験談も、なかなかレア度高めとも思うので、現在の学生さんには、どうか今の状況に絶望せず、どんな分野でも未知の世界へ挑戦することに前向きに、何事にも可能性を見いだして貴重な大学時代を過ごしてもらえたら、という気持ちでいる。

ところで、今回のオンライン授業では、先生から事前に学生に自分のビデオを ON にするように、と指示があったと聞く。皆の顔を見ることができ、話しながら、こちらも表情や相槌を打つ具合などからなんとなくの雰囲気を読み取ることができた。これは話す立場からするとありがたい。というのも、Zoom とは大容量のインターネット通信となるため、個々の環境によっては途中で接続が途切れたり、タイムラグが発生することがあるので、パンデミック当初、爆発的に Web 会議システムが普及した時期には、会社組織などにおいては「発言時以外、音声は原則ミュート、ビデオもオフにして会議に臨みましょう」といったことを言われることも多かった。数ヶ月経って人々が Zoom の使用に慣れてくると、最初こそオンになっていたビデオはどんどんオフになり、ただ喋る立場の人だけがひたすら無反

応の PC 画面に向かって話し続ける，という状況も増えた．その場に居合わせれば本来は感じられていたはずの相手の様子が一切わからない状況で話をし続けるということについては，聞く人の反応を見ながら臨機応変に話題を変え，話し方を工夫するといったコミュニケーション方法が使えなくなるため，話そのものが劇的につまらなくなる可能性が高い．だからこそ，少しでも相手の反応が見える状況というのは話者側にとっては大変重要になってくるのだ．

上記授業より後の 2020 年 11 月，私は出身のペルシア語学科の授業にも登壇する機会を得た．たまたま授業開始前の休み時間に恩師の研究室を訪れたところ，急遽飛び入り参加が決まった．こちらの授業は，対面とオンラインを兼ねた「ハイブリッド」というスタイルで，大学キャンパス内の共同研究室に集まる十数人の学生に加え，室内に設置されたモニターにリモート出席の学生が同数程度映し出されているという状況．ここでも初めてお会いする学生たちを前に，卒業生として今どんな仕事をしているのかなど，簡単にお話しさせていただいた．Zoom の時と違って驚いたのは，自分の実感として，やりとりのテンポ感は軽く，また話を聞いてくれている人の存在を現在進行形で体感できるということに至極安心感を覚えたことである．聞き手側が静かに話を聞いてくれていること自体はオンラインとは変わらないものの，人の熱量のようなものを肌で感じながら話すことは，それはそれでとても緊張することであるにも関わらず，その緊張感はオンラインの時よりも随分と軽い．例えば失敗しても笑って次に進む，とか，ジョークを飛ばす，あるいは誰かがテンポよくツッコミを入れる等，同じ空気の中で感覚を共有しているからこそやりやすく，多少話が下手でもスベってもなんとかなるかもしれないという状況こそが安心材料になるのだ．もちろん，オンライン上の集まりでも，人数が少ない場合や前段の関係性がきちんと構築されていればそのようなやりとりは全く可能だろうし，内容によっては話すときにむしろ目の前にリアルに人がいなくてよかった，と思えるような状況も大いにあるだろう．一方で，人がそこにいる時に生まれる「空気感」は，コンピューターでは信号に変換されない．一説によると，人間の五感のうち触覚や嗅覚，味覚といった「共有できない感覚」を共感してこそ人には信頼が生まれるため，視覚と聴覚に限定されたオンライン上のやりとりだけでは，人は繋がった気はしても原始的な部分で繋がれていないという²．オンライン上の交流が主流となった今，ただでさえ感覚に制約ある中でのコミュニケーションなので，自分が少しでも怪しくない

人間ですよ，ということを示すためにも，できる限りビデオはオンにしていた方がいい．ちなみにそう言う私は普段大人数の会議では，デフォルトでビデオ・オフ．冒頭で述べた社内での人間関係が希薄になると思われてしまうのは，デジタルツールの導入に原因があるのではなく，結局は私自身のコミュ障³気味性格が影響していると薄々は気が付いている．

ちなみに，大阪大学外国語学部では，実践的な学習が欠かせないため，2020 年後期授業からは，「対面」「オンライン」「ハイブリッド（対面＋オンライン）」の3種類の授業形態を実践し，授業内容に合わせて適宜使い分けられているという．また，インターネット環境が整わない学生のために，校舎内に高速 Wi-Fi に繋がられる教室がいくつか設けられているそうだ．ポスト・コロナの時代，どのような授業スタイルが主流になるのかは想像の域を出ないが，少なくとも言語文化研究という領域においては，人間のコミュニケーションの根幹を成す生きた言葉を勉強するにあたり，実際に会ったり体感したりすることの重要性は消えないだろうと思われる．一方で，国内・海外共に，遠く離れたところからでも授業に参加することが可能になり，しかもその離れた土地の現場感覚をもリアルタイムでモニター越しにでも伝え知ることができるようになったことは，学びの環境としてはかなり革新的な進歩だとも思う．新型コロナウイルス感染症のパンデミックで当分の間外国に行くことも，外国から来日することも難しくなり，特にマイナー言語などを学ぶ外国語学部の学生にとっては不遇の時代となってしまった．私も現地の空気を体感することの重要性をこれまで散々述べてきただけに，非常に悔しい気持ちでいっぱいである．しかし，感染症が流行るのも，インターネットで交流するツールが発達するのも，それは全て人類がコミュニケーションをとる生き物であるからこそ．ほんの少し前までには想像できなかったような「リモート授業」という新たな可能性が今回広がったのは事実なので，ぜひ今あるツールを最大限に活かしていただき，貴重な学生時代の学びに繋げていっていただきたいな，と願っている．

ドキュメンタリーの人は実際に会うことを重んじて，リアルなコミュニケーションが取れないことが関係性の希薄さに繋がると考える，と先ほど申し上げたが，現実的に渡航ができなくなった今，映像制作の現場でも，「リモート撮影」で海外取材を行なうことも増えている．電話，メール，ビデオ通話，データ送信で，すべてを行うのだ．こちらにも向こうにも人がいる．そして使える限りの道具と知恵を絞って，お互いにコミュニケーションを図

る。ドキュメンタリーとは実際に起こっていることを撮るため、制作者と被写体との人間関係や、実際の現場での発見がとても重要となるため、当然ながらリモートでは難しい局面も多々あるけれど、これからの時代、こういうスタイルも大いにアリかな、というか、どうしても使いこなしていけない時代になったからやるしかないよね、と弊社そして業界内の空気感も変わってきている。

最後に、実は今、2021年4月から新しい場所に移る大阪大学箕面キャンパスに関するドキュメンタリー番組制作を進めている。林田先生のオンライン授業に参加させていただき、改めて「大学キャンパス」が持っていた意味や価値って何だったんだろう、とふと疑問に思ったところから、箕面キャンパスが移転前最後の年であることに結びつき、企画着想に至った。今回は、リモート撮影ではなくスタッフが現場に入り、旧大阪外国語学校時代から100年に渡って培われてきた外国語学部らしい空気感を、校舎や図書館で実際に体感しながら日々撮影を進めている。コロナの感染状況が一向に落ち着く気配を見せず、ひとときも気を抜くことができない状況ではあるものの、多くの大学関係者にご協力を賜りながら、私たち制作陣もどうにか番組を無事に完成させ放送できるようにと全力で挑んでいる。そして実際にコロナ対応に引越し準備にと忙しくされている先生方を撮影しながら、コミュニケーションのスタイルが時代と共に変化したとしても、リアルであれリモートであれ、熱量を持って相手に接することが大事なのだということを、今私はひしひしと痛感している。撮影のため、様々な先生方にお会いし、お話しをお伺いしているのだが、皆さま本当にお熱い！対象言語や地域が異なっている、どの先生からも情熱がほとばしり、お話ししているだけでエネルギーを頂ける。そして「現地に行かないとわからないことだらけ(=フィールドワーク)」という、あらゆることがデジタル化された社会の中で少しずつ薄らぎ始めたその感覚を、改めて思わずにはいられなかった。今回、私自身が学生時代に全く接点のなかった様々な言語の先生にも数多くお会いすることができたからこそ、そこに共通する、外国語学部らしさ、みたいなものを改めて確認することができたように思う。そして、私が今ドキュメンタリーという、現場で生身の人と接することが宿命の仕事に就いたことも、この学部で学んだことから必然の選択だったかのようにさえ感じている。面白くていい大学で勉強させていただいてたんだなあ、9年間も在籍していたんだから、もっともっと頑張っただけ勉強すればよかったな、と、引越しに向けて着々と整理されていくキャンパスを前に、昔のことを

想う。そして、リアルでもリモートでもメールでもいつもめちゃくちゃ熱い林田先生の授業に、最後の最後で関わらせていただくことができ、本当に良い思い出になったと心から感じている。

追伸：

林田先生、長い間の御教鞭お疲れ様でした！

連絡不精の不束な私にも、毎年のようにメールをくださり、本当にありがとうございました。

先生のいつもご縁を大切にされるご姿勢が、すごく大切なことなんだと、こんな歳になってやっと気がつきました。

またいつかリアルでお会いできる日を楽しみにしています。

どうかお身体にお気をつけて、これからの日々をお過ごしくださいませ。

註：

¹ Zoom ビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービスの名称。インターネット上にミーティングルームを開設し、ミーティング ID やパスワードを共有するユーザー同士で多地点と同時に Web 会議を行うことができる。

² [人間の五感は「オンライン」だけで相手を信頼しないようにできている——霊長類の第一人者・山極京大総長にチームの起源について聞いてみた](#)（2017/9/27）参照

³ コミュ障とは、「コミュニケーション障害」の略だが、実際に定義される障害としてのコミュニケーション障害とは大きく異なり、他人との他愛もない雑談が非常に苦痛であったり、とても苦手な人のことを指して言われる俗称。